

20) サワフタギ=沢蓋木

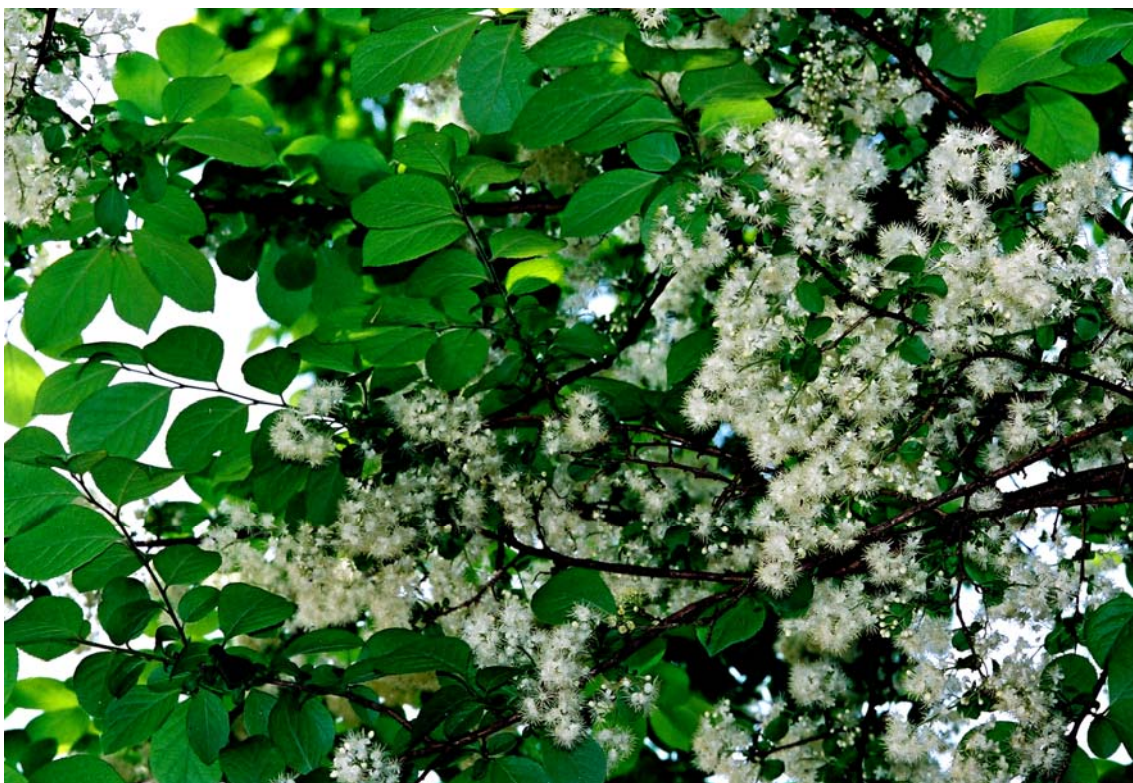
サワフタギはハイノキ科の落葉低木で、各地の山野でも特に沢沿いや谷間の湿気の多いところによく生える。高さは2~3m、葉は長さ4~7cm、細鋸歯があり互生し、5~6月ごろ梅の花を小さくしたような白い5弁花を円錐花序につける。果実は熟すると美しい瑠璃色になるが、中には白実のものがあり、これはシロミノサワフタギと呼んで区別し、庭木としてもよく植えられている。和名の由来は沢に蓋をするように繁るという意味で、別称はニシゴリ、ニシッコリ、ヤニギリ、ルリミノウシコロシ、イボタ、ツベタギなど極めて多い。ルリミノウシコロシは『瑠璃実の牛殺』(06-01-19 カマツカの項参照)と記す。アイヌではニマクカルニと呼ばれ、「歯を治す木」という意味である。学名は『*Symplocos chinensis*』で、属名は「結合した」という意味で、雄シベの基部が癒合しているために名付けられたものである。サワフタギの材は堅く強いので、道具の柄にしたり、細工ものや器具などに用いられる。また枝葉を焼いた灰は『紫紺染め』の媒染材として利用された。本種がハイノキ科に属するのもこのためで、ハイノキは『灰の木』で、ハイノキ科の植物はハイノキ、クロバイなど、染色の媒染剤(06-03-00 参照)として用いられるものが多い。また別称のニシゴリは『錦織』のことである。

さて紫紺染めは岩手県に伝わる染色技法で、江戸時代には南部藩の保護の下、大事な地場産業として栄えた。しかし明治になると外国からアニリン染料が輸入されるようになり、紫紺染めは急速に廃れてしまった。その後紫紺染めの復活をめざして1916年(大正5年)に『南部紫紺染研究所』が設立されて、旧来の染色技術の復興を試みた。しかし当初はすでに染色技術者も、また紫を栽培した農民や、これを買集めた商人も全て故人となり大変だったらしい。宮沢賢治はこの間の事情を面白く記録している。賢治によると、山男が西根山というところに分け入って紫紺の根を掘り取り、これを夕刻になると盛岡の城下に持ち込み、材木町の生薬商人近江屋源八に、一表二十五文で売りさばいた。山男は金を手にすると酒屋の半之助のところへヒョウタンを持って行き、ヒョウタンに酒1斗を入れさせて、二十五文をそっくり置いて帰ったのだという。このような古い記録を頼りに山男を探し当てて、この男に酒や肴を振舞って、紫紺染めの話を聞き出そうとしたのだが、この男は山男の息子で、当の山男はこれも故人となっていたというのである。しかしこの自称アル中の息子は父親から聞いた紫紺染めにまつわるいくつかの話をへべレケになりながらも語る。彼の話によると西根山には紫がたくさんあり、何でも染めるには湿った黒い土を使うのだという。こうした検証を繰り返しながら、県の工業会の役員や工芸学校の先生が苦労を重ねてこの技術を復活したのだという。研究所の主任技師だった藤田謙は1933年に独立して、『草紫堂』を創業、現在もこの店は続いている(06-03-01 ムラサキの項参照)。

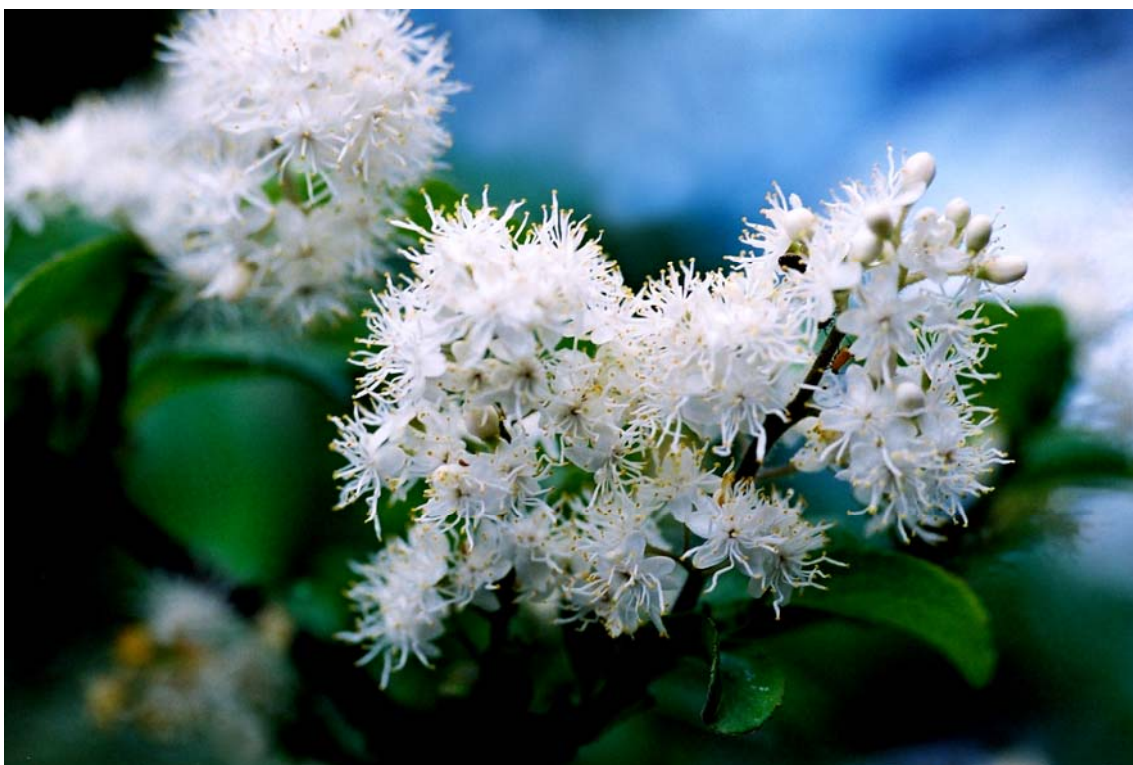
さてサワフタギの苗木は滅多に見られないものの、ネットで購入するか、湿気の多い山野を歩いているとよく見かけるので、種子を播種して育てるのも一つの方法である。



サワフタギの花。東京近郊ではちょうど連休の頃に満開になる(文京区小石川植物園)。



サワフタギの花、全国の低山地帯の特に湿り気の多いところを占拠し、まるで沢をふさぐように茂るところからこの名前になった。しかし尾根筋などでもよく育つ(茨城県水府村)。



サワフタギの花、果実は瑠璃色に熟して美しい(茨城県水府村)。



サワフタギの花、雄蕊が長く花冠から飛び出しているのがこの花の特徴で、まるでマツゲの長い女の子のようにも見えて可愛らしい(茨城県水府村)。



黒実のサワフタギ、通常は青実だが白実もある(東京都文京区小石川植物園)。

[目次に戻る](#)